特集：ワイルドから見るアメリカ／アメリカから見るワイルド

ウィルダネスの活用
――環大西洋的想像力における〈ワイルド・ウェスト〉

貞廣　真紀

1957年から1963年にかけてCBCで放送された『西部のパラディン』（*Have Gun, Will Travel*）第2シーズンに「オスカー・ワイルドのバラッド」（“The Ballad of Oscar Wilde,” 1958）というエピソードがある。舞台はサンフランシスコ、アメリカに講演に来ていたオスカー・ワイルド（Oscar Wilde）はギャングに誘拐、監禁されてしまう。ガンマンのパラディンが救出を試みるのだが、ワイルドは囚われの身でありながら、「身代金が安すぎたから値上げしてもらった」とか「これは面白い劇だ、私が気にいる第3幕を考えて欲しい」とパラディンに助言するなど、自ら主演あるいは劇監督であるかのように振る舞う。他方、パラディンの方も、しばしば（歴史上の）ワイルドの箴言を口にする。あたかもワイルドがパラディンを模倣して今日私たちが知るワイルドになったかのような演出である。見た目や振る舞いの露骨な相違にもかかわらず、二人が阿吽の呼吸でギャングを倒すエンディングは、ワイルドが西部人のバディとして位置付けられていることを示唆するだろう。

「オスカー・ワイルドのバラッド」はワイルドと西部を結ぶひとつの例に過ぎない。ともに『ワイルド・ウェスト』（*Wilde West*）と題されたウォルター・サタスウェイト（Walter Satterthwait）の小説（1991）やチャールズ・マロウィッツ（Charles Marowitz）の戯曲（1998）がよい例だが、イギリス唯美主義とアメリカ西部という、いかにもそぐわない組み合わせがアピールするのだろう、ワイルドとアメリカ西部を紐付ける新聞や雑誌記事は枚挙にいとまがない。しかし、その関係はミスマッチの妙にとどまるのだろう

か。

ワイルドが西部に関心を持っていたことは明らかである。彼は「アメリカの侵略」(“The American Invasion,” 1887) において、イギリス人の関心の対象は文明化された東部ではなく西部が体現する「アメリカの野蛮」であると書いている (341)。また、1882年のアメリカ講演の際、彼は地方新聞のインタビューに百回近く応じたが、その中でも繰り返し、関心の所在が西部にあると語っている。ではなぜ、そして、どのように「西部」はワイルドを必要としたのだろうか[1]。本稿ではまず、19世紀後半の環大西洋批評空間で西部がどのように構築され、ワイルドがどのようにそれに巻き込まれていったかを検証する。また、ワイルドのアメリカ講演期は、東部の外縁としての西部が「西部」というまとまりとして確立する時期に当たるのだが、本稿では特に境界州に注目することで、外縁を内包し続ける「西部」特有の性質を確認し、ワイルドがその存立の機制を反復する共振関係を考えてみたい。

1. 「西部」を演じる男たち

「アメリカの装飾芸術」(“Decorative Art in America,” 1906) の中でワイルドは西部の炭鉱夫の服装を称えてこう書いている。

> In all my journeys through the country, the only well-dressed men that I saw . . . were the Western miners. Their wide-brimmed hats, which shaded their faces from the sun and protected them from the rain, and the cloak, which is by far the most beautiful piece of drapery ever invented, may well be dwelt on with admiration. Their high boots, too, were sensible and practical. They wore only what was comfortable and therefore beautiful. (8)

彼が実際に「絵のように美しい鉱夫」(“picturesque miners”) を見たのは渡米の際だったかもしれないが、その存在を意識したのはおそらくこれが初めてではなかったはずだ。というのは、それ以前、すでにイギリスに「西部」を売り込んだ詩人がいたからである。それが、後に世紀転換期のカリフォルニアでヨネ・ノグチが丁稚奉公したことで知られるホアキン・ミラー

（Joaquin Miller）だ。

1839年にインディアナ州に生を受けたホアキン・ミラーは、ゴールドラッシュのニュースに鼓舞されて西部に移住し、サンフランシスコでボヘミアン・サークルの人々と交流を持つ。しかし、さらなる活動の拠点を求めて1870年11月に渡英、1871年にはロングマン社から『シエラ・ネバダ山脈の歌』（*Songs of the Sierras*）を出版している。注目したいのは、その際、彼がカウボーイあるいはフォーティーナイナーズのコスチュームを纏い、「ロッキー山脈のバイロン」として自らを売り込んだことである。ミラーの本名はシンシナタスでホアキンはペンネームなのだが、それは「西部のロビンフッド」と呼ばれたアウトロー、ホアキン・ムリエッタ（Joaquin Murietta）に由来する。つまり、彼が売り込んだのは詩というよりむしろ西部アウトローのパーソナリティだったのだ。当時、「アメリカで自分は評価されていない」とイギリス文壇に訴え、アメリカに自らを逆輸入することを仕掛けた詩人にウォルト・ホイットマン（Walt Whitman）がいるが、ミラーはホイットマンと並んで、ウィリアム・マイケル・ロセッティ（William Michael Rosetti）の目に留まり、ラファエル前派の人々の注目を集めることになった（Peterson 65）。

ミラーの振る舞いが西部文学の形成と連動していたことは、彼に独特の衣装を提案したのがアイナ・クールブリス（Ina Coolbrith）だったことからも窺える（Rhodehamel and Wood 105）。当時サンフランシスコでは、ブレット・ハート（Bret Hart）が東部の『アトランティック・マンスリー』に対抗する雑誌として『オーヴァーランド・マンスリー』を創刊し、西部独自の文学の創出を目論んでいた。スティーヴン・メクサルは、1860年代、西部の都市部ではすでに脅威的なフロンティアは過去の遺産であり、人々の郷愁がウィルダネスとしての西部という幻想を生み出したと指摘している（Mexal, Introduction）が、「西部」は東部の他者として切り出され、一元化されていったと言えるかもしれない。ミラーは「西部」という共同幻想の市場を東部からイギリスに拡張することを仕掛けた最初期の人物だったということになるだろう。

西部構築の立役者であるミラーにワイルドは無関心ではなかった。彼はミラーを「アメリカの偉大な詩人の一人であり、新世界から出てきた新世

界についての詩人」と呼び（“Oscar as He Is” 13）、ホイットマンと並べて高く評価している（“Oscar Wilde,” *Salt Lake Herald* 8）。また、1882年2月7日のロチェスター講演で、白人の観客がミンストレルショーの装いで講演を妨害する事件が起こった際（Lewis and Smith 155-60）、即座にワイルドを励ます手紙を送ったのも彼だった。のちにワイルドはミラーとの往復書簡を「ホアキン・ミラー――良きサマリア人」として出版するのだが、ここでもミラーはワイルドの西部への憧憬を強化することに貢献したと言えよう。

> I read with shame about the behavior of those ruffians at Rochester at your lecture there. When I see such things here in the civilized portion of my country and read the coarse comments of the Philistine Press, I feel like thanking God that my home lies three thousand miles further on, and in what is called the wilderness. Should you get as far as Oregon in your travels, go to my father's. You will find rest there and room, as much land as you can encompass in a day's ride, and I promise you there the respect dues a stranger to our shores, to your attainments, your industry, and your large, generous, and tranquil nature.（19）

興味深いことに、ワイルドが西部的「野蛮」を自らの外部に位置づけたのに対し、アメリカの聴衆はむしろそれを彼の内部に見いだした。聴衆は講演内容よりワイルドの姿に目を向け、以下の例に見られるように、西部人、とりわけバッファロー・ビル（Buffalo Bill）とのアナロジーを通じて彼を消費していくのである。

> He [Wilde] was “a prototype of Buffalo Bill, Texas Jack, or any of the tall, long-haired heroes of wild western border life.” (“Oscar Wilde,” *Kansas Daily Times* 4)

> The head was ornamented with long ambrosial locks of very dark hair, and capped with a broad-brim, dim colored slouch hat, something after the style of Buffalo Bill or Texas Jack. (“Oscar Dear, Oscar Dear!” 4)

ダイムノベルに描かれたことで「生きた英雄」となり、西部人としてのパーソナリティを自ら演じながら、「西部」をアメリカの国家的エンターテインメントに仕立てあげたショーマン、それがバッファロー・ビルである（Kasson 24-41）。ワイルドは「アメリカの侵略」において、「ワイルド・ウェスト・ショー」の興行でイギリスを訪れたバッファロー・ビルを「アメリカの野蛮」の代表格として取り上げているのだが（341）、ミイラ採りがミイラになるがごとく、ワイルド自身が彼と重ねられているのだ。

西部人を他者化しているつもりが自ら他者化され、西部イメージの一部として買われるという反転のメカニズムは、アメリカの観客がライシアムに代表される講演文化に慣れ親しんでいたことと無関係ではないだろう。1826年のジョサイア・ホルブルック（Josiah Holbrook）に端を発するライシアム運動は19世紀中庸までに急速にアメリカで拡大した。1830年代にはさまざまな地域でディベート・クラブや一般大衆をターゲットにした公開講演主催組織が形成され、その後、東部から西部開拓地にも拡大してアメリカ全土に教養と娯楽を提供していく。1868年にトマス・ウェントワース・ヒギンスン（Thomas Wentworth Higginson）はエッセイ「アメリカの講演システム」（“The American Lecture-System”）の中で、その広がりをこう表現している。ライシアム講演者は国家文明のネットワークを作り出す「生きた杼」（living shuttle）である、と（qtd. in Ray 23）。こうした背景を踏まえると、興行的にはともかく、ワイルドのアメリカ講演が内容的に成功と言えるものではなかったのは無理もない。彼のアメリカでの「一儲け」は痛烈に批判され、また、その単調な話しぶりはひどく不評で、「オスカーが弁論術を学んだことがないのは明らかだ」とまで言われている（“Ah, Oscar” 8）。アメリカの聴衆の耳は、おそらくワイルドが想定していた以上に肥えていたのである[2]。さらに、講演という文化伝達形式ばかりではなく、アメリカの観客の多くは「もの珍しい」講演者にも一定程度慣れていた。というのは、ヒギンソンの比喩が示唆するように、ライシアムはアメリカに一枚岩的な教養を授けるというナショナリズム的側面を持っていたが、同時に、世界各地の旅行ネタを開示したり、国際的著名人やネイティブアメリカンなど「エキゾチックな」講演者を擁したりすることで、コスモポリタニズムとも分かち難く結びついてもいたからである。アンジェラ・レイは、

ライシアムの観客はアメリカを海外の出来事とのアナロジーによって理解しようとしたと指摘しているが（Ray 35）、ワイルドの講演の受容においても似たプロセスを想像できる。つまり、見慣れぬ衣装を身にまとうワイルドを、観客は自らの脅威にならない仕方で理解すべく、見慣れた西部人セレブリティと結びつけ、アメリカ的でありながら同時にコスモポリタン的な空間としての西部を膨張させていったのである。

2. アイルランド人ワイルド、あるいはフロンティアのアウトロー

「西部」が環大西洋批評空間で醸成された認知地図上の場所であるとすれば、厳密な地理区分としては存在しないことになる。レズリー・フィードラー（Leslie Fiedler）は「この捉えがたい西部は地理的にはどこにあるのか」（“But where, geographically, is the elusive West?”）と問いかけたが（26）、実際、西部とは西漸線（フロンティア）であり、東部の外縁として動き続けてきた。とりわけ南北戦争後の西部は、敗戦国である南部連合国を抱え込みながら再定義を迫られていた。そして、この外縁を包摂し続ける西部の性質こそ、ワイルドを「西部」に一層強く結びつけたように思われる。

ここで南北戦争時に境界州のひとつだったカンザス州での受容に注目してみたい。従来の研究の多くがワイルドの西部コネクションを扱う際、コロラドかカリフォルニアに焦点を合わせてきたが[3]、流動的な中西部を取り上げることで、アイルランド人としてのワイルドと「西部」の関わりを見直すことができるかもしれない。

ワイルドのカンザスでの講演は四回で（4月19日のレヴンワースを皮切りに、トピカ、ローレンス、アチソン）、イリノイ州、ニューヨーク州、カリフォルニア州を除けば、回数的には多い部類に属する。内容はお決まりの「装飾芸術」だったが、新聞は講演に対する失望を隠さないばかりか、ほとんど攻撃的でさえあった。1882年4月22日の『アチソン・グローブ』には、編者エド・ハウ（Ed Howe）による架空のインタビュー（最後に会場のホテルが崩れ落ちてハウとワイルドが死亡する）が掲載され、そこでは、講演内容のオリジナリティの欠如や金儲け精神が痛烈に批判されている（“Oscar Wilde” 1）。さらに同紙の別の紙面には、「図解付きダーウィンの理論」（“The Darwinian Theory Illustrated”）と題された記事が掲載され、「最

初に捕まえられた時」の様子としてココナツを持った猿の絵が、「訓練後」としてひまわりを持ったワイルドの絵と併置されている（3）[4]。1882年1月28日の「ハーパーズ・ウィークリー」に掲載の「審美的猿」（“The Aesthetic Monkey”）の版画がよく知られているが、ここでもワイルドは人間の外縁に位置付けられているのだ。

カーティス・マレズは、アメリカ講演の受容にしばしば見られる「ワイルドの類人猿化」（“wild(e) apeman”）は「類人猿に似たアイルランド人」という世紀転換期の人種観に基づくと指摘する（Marez 267）。ワイルド本人は汎ヨーロッパ的、さらにオリエントにも広がる「美の帝国」について語り、その中にアイルランド性を抑圧しようとするのだが、ワイルドの意図に反して、聴衆は彼の中にアイルランドを見出した（Marez 258）。猿のイメージはアメリカ先住民、アフロ・アメリカン、中国人移民やハワイ先住民など、そのほかの「劣等」人種のイメージを呼び込みつつ、同時に、これもまたワイルドの受容に頻出の「オリジナリティの欠如」（「模倣する」の意味での“to ape”）の揶揄につながると論じている。なるほどそのように考えると、先に言及したロチェスターの妨害事件も、ミンストレルショーの担い手としてのアイルランド系移民の歴史を喚起してワイルドのアイルランド性を暴露しつつ、講演内容の模倣性を揶揄していると理解することができるだろう。

しかし、ワイルドのアイルランド人としての性質を強調することが必ずしも他者化を意味するわけではないことも加えておく必要がある。実際、1870年までにカンザスに入植した移民の多くはアイルランド人であった（Church）。ワイルドがアイルランド系移民に言及しないにも関わらず、こうした地域では彼のアイルランド性は、他者性よりむしろ同胞意識を喚起する。例えば、『レヴンワース・ウィークリー・タイムズ』は1882年1月26日の似顔絵入りの長文記事でワイルドを「オスカー・ワイルド、若きアイルランド人」と紹介し（“Oscar Wilde: The Lecturing Aesthete” 2）、4月21日の『トピカ・デイリー・キャピタル』は彼の口調を「柔らかいアイルランドの話し方」（“gentle Irish way”）と形容する（“Ah, Oscar” 8）。かと思えば、3月24日の『レヴンワース・タイムズ』はセント・パトリック・デイのワイルド講演を転載してそれに共鳴し（Anthony 2）、さらに4月16日に掲載の

投書では、なぜボストンは「私たちの親愛なるオスカー」に優しくなれないのかという嘆き節が見られる（“Oscar Wilde. To the Times” 2）。また、4月18日の『レヴンワース・スタンダード』には、住民の一人がワイルドの父親の知り合いで、ワイルドが13歳になるより前の少年時代に会ったことがあるという証言まで出てくるという具合だ（“Personal Mention” 4）。レヴンワースの新聞がアイルランド人に共感的なのは、1871年にこの街の牧師トマス・バトラー（Thomas Butler）が『カンザス州とアイルランド移民』（*The State of Kansas and Irish Immigration*）を出版し、さらなる入植を呼びかけていることと無関係ではないかもしれない（Church）。アイルランド系移民だからといって必ずしもワイルドを手放しで評価するわけではないだろうが、それと等しく、「アイルランド化」が常に他者化を意味するわけでもないのだ。むしろ、他者であると同時に同胞でもあるというワイルドの位置づけが拮抗し、雪だるま式にワイルド評を増幅させていったと考える方が実情に近いだろう。

とりわけ南北戦争後の西部は、他民族を擁する場所という意味でアメリカの外縁であったのみならず、もうひとつのアメリカ、すなわちアメリカ連合国をも吸収した地域でもあった。実際、ワイルドがカンザスで講演した四つの街は全てミズーリ州境沿い、すなわち、戦争直前の呼称「血を流すカンザス」（bleeding Kansas）が端的に示すように、奴隷制支持派と反対派がせめぎ合っていた地域である。こうした境界州に南部に対する憎悪と共感の両方が堆積していることは想像にかたくない。そして、おそらくこうした地域の両義性を体現するのがジェシー・ジェイムズ（Jesse James）――ワイルドの言葉を使えば「カンザスの偉大ななならず者」（“the great desperado of Kansas”）――だろう（Wilde, *Selected Letters* 43）[5]。ジェイムズは鉄道強盗、銀行強盗を繰り返す犯罪者だったが、旧南軍ゲリラでもあった。彼は単なる西部人ではなく賊国の残党でもあったがゆえに、「もともとは賊国であったアメリカの」アウトローになりえたのである。

カンザス講演の直前、このアメリカン・アウトローの生涯を辿るように、ワイルドはジェイムズの生地カーソンを訪れ、その後、2週間前に彼が暗殺されたばかりのセント・ジョセフで講演を行なっている。カンザスの記者たちにとって、ジェイムズの暗殺とワイルドの訪問という「事件」は、ど

ちらも見逃せない出来事だったようだ。1882年4月22日の『トピカ・デイリー・キャピタル』には「オスカー・ワイルドのブームが幾分収まったので、野心的なリポーターは今、ジェシー・ジェイムズ夫人にインタビューする栄誉に与することを狙っている」とあるし（King 4）、両者についての記事を併置する新聞は後を絶たない。むろん、この時点ではジェイムズの死とワイルドの来訪は隣接した出来事に過ぎないのだが、二人の関係はいつしか類似に読み替えられていく。1887年10月7日の『スカンディア・インディペンデント』には「ヒーロー崇拝」という記事が掲載され、過ったヒーロー崇拝として、ワイルドとチャールズ・ギトーとジェイムズの三者に対する崇拝が併置されているのだ（Beecher 2）。ジェイムズとワイルドを重ねる傾向は20世紀にも引き継がれ、マロウィッツは戯曲『ワイルド・ウェスト』の中でワイルドとジェイムズが美青年をめぐって対決する様子を描いている。

ジェシー・ジェイムズに代理される旧南部連合国を包摂する西部の拡張性こそ、人種的な意味で大英帝国の外縁に位置付けられたアイルランド人としてのワイルドを西部に取り込む動力だったのではないだろうか。実際、ワイルドはアメリカの内なる外部である南部と、大英帝国の内なる外部としてのアイルランドの類似性を語っている。「これが、私が自分の民族であるアイルランド人に抱くのと同様に、南部の人たちに対して抱く感情なのです。ジェファーソン・デイヴィス氏を訪問するのを楽しみにしています」と（“This is my feeling about the southern people as it is about my own people, the Irish. I look forward to much pleasure in visiting Mr. Jefferson Davis.”）（“Oscar Wilde Talks to Texas” 11）。ジェイムズ巡礼の後、ワイルドは「アメリカ人は間違いなく英雄崇拝者だ。そして常にヒーローは犯罪者階級から出てくる」（“Americans are certainly great hero-worshippers, and always take［their］heroes from the criminal classes.”）と書いていた（Wilde, *Complete Letters* 164）。それはワイルドが「犯罪者」となったとき一層明瞭なかたちで現実化するのだが、アイルランド人であるという資格において、そのことはすでに予言されていたと言えるかもしれない。

3. リトルブルーブック・シリーズ――牢獄と社会主義

さらに1910年代後半、カンザスにもうひとつの大きなワイルド受容の転機が訪れる。カンザス州鉱山町ジラードを拠点にした社会主義系新聞『アピール・トゥー・リーズン』(*Appeal to Reason*)から生まれたリトルブルーブック・シリーズ(Little Blue Book Series)の創刊である。1920年代から30年代の多くの新聞にこのシリーズの宣伝が掲載されており、広く普及していたことがうかがわれるのだが、一体どのようなシリーズだったのだろうか。

リトルブルーブック・シリーズは、エマニュアル・ハルドマン=ジュリアス(Emanuel Haldeman-Julius)が1919年に開始したアピール・ポケットシリーズ(Appeal Pocket Series)の後継シリーズである。そして、その最大の特徴は労働者階級への教養の普及を意識している点にある。安いもので1冊1セント、高くても25セントという破格の価格設定に加え、旅行者や労働者のポケットに収まるサイズで印刷されていた。さらに、新聞広告のメールオーダーのみならず、ドラッグストアや玩具屋、自動販売機でも販売されていたようである。(Haldeman-Julius, *Miscellaneous Essays* 55)。

シリーズ創始者のハルドマン=ジュリアスは1915年、新聞社アピールに編集者として入社した。当時、編集長を勤めていたのが社会主義者のユージン・デブズであったことからもわかるように(Herder 883-84)、『アピール』は、第一次大戦前、アメリカの社会主義を牽引する新聞だった。ピーク時の購買数は70万部に近かったが、創業者ジュリアス・ウェイランドの自殺の後、急速な求心力の低下に喘いでいた。ハルドマン=ジュリアスはまさに救世主として到来したのである[6]。彼にとって、ワイルドは文学的原体験そのものだった。彼は後にシリーズの起源をこう振り返っている。

> I dropped into a small bookstore at 5th and Pine [S]treets, run by Nicholas L. Brown. There, on a table neat the door, I picked up a pamphlet edition of Oscar Wilde's "The Ballad of Reading Gaol." . . . . It was winter, and I was cold, but I sat down on a bench and read that booklet straight through, without a halt, and never did I so much as notice that my hands were blue, that my wet nose was numb, and that my ears felt as hard as glass. Never

until then, or since, did any piece of printed matter move me so deeply.（*The World of Haldeman-Julius* 28）

ワイルドの本を人々が気軽に手に取ることを願い、ハルドマン＝ジュリアスは1919年に印刷工場を買い受けるやいなや、アピール・ポケットシリーズの1巻と2巻としてオマル・ハイヤームの『ルバイヤット』と『レディング監獄のバラッド』を出版したのである。『レディング監獄』の初版の広告が掲載された1919年2月22日の『アピール』の見出しが「ユージン・デブズの監獄」であったことは偶然ではないだろう。当時『アピール』は投獄されたかつての編集長デブズの救済を求めてキャンペーンを張っていた（Schocket 69）。初版版広告はなぜワイルドが投獄されたのかに触れておらず、そのためにいっそう、彼の苦境は社会主義者のそれとして前景化される。

とはいえ、このシリーズのもうひとつの売りが「性」であったことも見逃せない。リトルブルーブック・シリーズはそのコンテンツの選定に関して、思想的にも人種的にも文化多元主義的だったが（Schocket 70）、その態度は性の扱いについても当てはまる。ハルドマン＝ジュリアスの妻マルセットが当時のアメリカでは珍しい離婚擁護派で、「友愛結婚」（Companionate Marriage）を提唱し、生殖に結びつかない性の重要性を強く主張した人物でもあったこともこのことに関係するだろう（Scott 168）。シリーズ最初期のラインナップは、同性愛が同胞愛として、反植民地主義や菜食主義など様々な急進的社会改革思想と相互関連的に受容されていた19世紀末の社会主義雑誌を思わせるもので、ロバート・ブラッチフォードやトルストイと並んでエドワード・カーペンターの『愛の成就』（Edward Carpenter, *Love's Coming of Age*, 1896）が「世界で最も偉大な性の本」として紹介されている（Haldeman-Julius, “Editorial” 4）。また、シリーズの性に対する関心は、ハヴロック・エリスの著作が最初から3冊もシリーズに含まれていることや、1925年にはアイザック・ゴルドマンによるエリスの伝記が加えられたことからも窺える。ハルドマン＝ジュリアスは「アメリカの読者は性を恐れていないようだ。彼らは性を事実として認識し、性についてより多くの事実を知りたがっている」と書いているが（Haldeman-Julius, *The First Hundred Million* 23）、実際、シリーズの売れ筋は性を扱う著作の数々で、そこには

『現代世界における売春』や、避妊に言及したマーガレット・サンガーによる『すべての少女たちが知っておくべきこと』に加えて、『ホモセクシュアル・ライフ』も含まれている（Haldeman-Julius, *The First Hundred Million* 23-33）。表立って同性愛者が強調されたわけではないが、出版社とシリーズ全体の傾向を踏まえると、ワイルドの同性愛もまた、性のひとつの事実として、そしてシリーズが体現するラディカリズムの一面として、一定の位置を与えられていたと考えられるのではないか。

おわりに――Wild/e West、あるいは、あまりに西部的なワイルド

イギリスで嘲笑されたワイルドはアメリカでも手放しで受け入れられたわけではない。しかし、アメリカの人々は数々の西部人とのアナロジーによってワイルドを理解しようとしてきた。西部人だけではない、ワイルドは「西部」そのものと共振していたようにさえ思える。西部空間の演劇的構築性はワイルドの演劇性を思わせるし、また、彼の累加的なマイノリティ性は、アメリカの外縁として「ウィルダネス」を担い続けた西部のイメージに重なるからだ。アウトローが英雄になり、受け入れられないこと――犯罪者あるいは牢獄の人――こそが受け入れられる根拠になりうるカウンター・カルチャーの土壌において、抑圧はその回帰を準備していたと言っていい。それゆえに――今一度「オスカー・ワイルドのバラッド」に戻れば――ワイルドは、西部によって「救われる」人物であると同時に、西部のバディとして描かれることになったのではないだろうか。

＊本稿は、日本ワイルド協会第46回大会（2021年12月11日、オンライン開催）におけるシンポジウム「ワイルドから見るアメリカ / アメリカから見るワイルド」における口頭発表「ウィルダネスの活用― 環大西洋文学空間における〈ワイルド・ウエスト〉の生成」の原稿および配布資料に大幅な加筆修正を施したものである。

注

1　ワイルドと西部の関係を扱った研究としては、例えばNovakを参照。ノヴァクはカウボーイのマスキュリニティに注目して『ワイルド・ウェスト』2作品を

分析している。

2　ライシアムは女性が社会とつながる舞台でもあった（Wright 10）。ライシアムが娯楽に加えて教育の役割を担ったことを意識するなら、ワイルドの講演の教育的遺産がアメリカの女性たちによる内装文化の発展として引き継がれることも納得がいく。

3　例えばMarezを参照。また、Pochmaraはワイルドがアメリカ極西部にイギリスの他者性を投射することでイギリス人としての自己を確立しようとしたと論じている。

4　ハウの記事についてはCagle 240-43を参照。他にも、地方紙の編者についての情報や掲載広告など、カンザス州におけるワイルドの受容の詳細が紹介されている。

5　厳密に言えばジェイムズはミズーリ人だが、ワイルドの誤解が州境の曖昧さに由来すると考えれば興味深い。

6　ハルドマン＝ジュリアスの社会主義コネクションは興味深い。彼は17歳の頃、50歳近くだったホレス・トローベル（Horace Traubel）と一緒に頻繁に外出していたようである。トローベルは晩年のホイットマンの言葉を書きとめ、『カムデンのウォルト・ホイットマン』をまとめた人物だが、彼は社会主義者たちの間でよく知られており、デブズやマイク・ゴールドにホイットマンを紹介して30年代の左翼系の受容の土台を築いた。ハルドマン＝ジュリアスはホイットマン協会の晩餐会にも参加し、また、ホイットマンはゲイだったのかとトローベルと議論したこともあるようだ（Haldeman-Julius, *The World of Haldeman-Julius* 95）。

引用文献

"Ah, Oscar: Beauty's Great Exponent." *The Topeka Daily Capital*, 21 Apr. 1882, p. 8.

Anthony, D. R. "Editorial." *The Leavenworth Times*, 24 Mar. 1882, p. 2.

"The Ballad of Oscar Wilde." *Have Gun, Will Travel,* 1958, directed by Andrew V. McLaglen, CBS Productions, 1957.

Beecher, Janet. "Hero Worship." *The Scandia Independent*, 7 Oct. 1887, p.2.

Cagle, Charles Harmon. "Oscar Wilde in Kansas." *Kansas History*, vol. 4, no. 4, 1982, p. 227-44.

Church, Michael. "Irish Immigration." *Kansas Historical Society*, https://www.kansasmemory.org/blog/post/74315032. Accessed 30 June 2022.

"Editorial." *The Leavenworth Times*, 24 Mar. 1882, p. 2.

Fiedler, Leslie A. *The Return of the Vanishing American*. Stein and Day, 1968.

Haldeman-Julius, Emanuel. "Editorial." *Appeal to Reason*, 1 Mar. 1919, p.4.

——. *The First Hundred Million.* Simon and Schuster, 1928.

——. *Miscellaneous Essays*, Haldeman-Julius Company, 1923.

——. *The World of Haldeman Julius.* Edited by Albert Mordell, Twayne, 1960.

Herder, Dale M. "Haldeman-Julius, the Little Blue Books, and the Theory of Popular Culture." *Journal of Popular Culture*, vol. 4, no. 4, 1971, pp. 881-91.

Howe, Ed."The Darwinian Theory Illustrated." *The Atchison Daily Glove*, 22 Apr. 1882, p.3.

——. "Oscar Wilde in Atchison." *The Atchison Daily Glove*, 22 Apr. 1882, p.1.

Kasson, Joy S. *Buffalo Bill 's Wild West Celebrity, Memory, and Popular History*. Hill and Wang, 2000.

King, Henry. "Editorial." *The Topeka Daily Capital*, 22 Apr. 1882, p.4.

Lewis, Lloyd and Henry Justin Smith. *Oscar Wilde Discovers America, 1882.* Harcourt, Brace, 1936.

Marez, Curtis. "The Other Addict: Reflections on Colonialism and Oscar Wilde's Opium Smoke Screen." *ELH*, vol. 64, no. 1, 1997, pp. 257-87.

Mexal, Stephen J. *Reading for Liberalism The Overland Monthly and the Writing of the Modern American West.* Kindle, ed., U of Nebraska P, 2013.

Novak, Daniel A. "Performing the 'Wilde West': Victorian Afterlives, Sexual Performance, and the American West." *Victorian Studies*, vol. 54, no. 3, 2012, pp. 451-63.

"Oscar as He Is," *St. Louis Republican*, 23 Feb. 1882, p. 13.

"Oscar Dear, Oscar Dear!" *Charleston News and Courier*, 8 July 1882, p. 4.

"Oscar Wilde." *Kansas Daily Times*, 20 Apr. 1882, p. 4.

"Oscar Wilde," *Salt Lake Herald*, 12 Apr. 1882, p. 8.

"Oscar Wilde Talks to Texas." *New Orleans Picayune*, 25 June 1882, p. 11.

"Oscar Wilde: The Lecturing Aesthete." *The Leavenworth Weekly Times*, 26 Jan. 1882, p.2.

"Oscar Wilde. To *The Times*." *The Leavenworth Times*, 16 Apr. 1882. p. 2.

"Personal Mention." *The Leavenworth Standard*, 18 Apr. 1882, p. 4.

Peterson, Martin Severin. *Joaquin Miller Literary Frontiersman.* Stanford UP, 1937.

Pochmara, Anna. "Between Elysium and Inferno: The Rhetoric of Ambivalence in Oscar Wilde's and Rudyard Kipling's Writings about America." *Journal of Transatlantic Studies*, vol. 13, no. 1, 2015, pp. 56-75.

Ray, Angela G. "How Cosmopolitan Was the Lyceum, Anyway?" Wright, pp. 23-41.

Rhodehamel, Joseph DeWitt and Raymund Francis Wood. *Ina Coolbrith Librarian and Laureate of California*. Brigham Young UP, 1973.

Schocket, Eric. "Proletarian Paperbacks: The Little Blue Books and Working-Class Culture." *College Literature*, 2002, vol. 24, no. 4, pp. 67-78.

Scott, Mark. "The Little Blue Books in the War on Bigotry and Bunk." *Kansas History*, vol. 1, no. 3, 1978, pp. 155-76.

Wilde, Oscar. "The American Invasion." *Court and Society Review,* vol. 4, no. 145, 1887, pp. 341-43.

——. *The Complete Letters of Oscar Wilde*, edited by Merlin Holland and Rupert Hart-

Davis, Henry Holt and Company, 2000.

——. “Decorative Art in America: A Lecture.” *Decorative Art in America Lecture by Oscar Wilde*, edited with an introduction by Richard Butler Glaenzer, 1906, pp. 1-15.

——. “Joaquin Miller, the Good Samaritan.” *Decorative Art in America Lecture by Oscar Wilde*, edited with an introduction by Richard Butler Glaenzer, 1906, pp. 19-22.

——. *Selected Letters of Oscar Wilde*, edited by Rupert Hart-Davis. Oxford UP, 1979.

Wright, Tom F., editor. *The Cosmopolitan Lyceum Lecture Culture and the Globe in Nineteenth-Century America*. U of Massachusetts P, 2013.

Wright, Tom F. “Introduction.” Wright, pp. 1-19.